自社アロマでスパ事業

富山に直営サロン

前田薬品工業

アロマブランドの製品を用いたサービスを行う直営サロン＝富山市八人町

前田薬品工業（富山市向新庄町、前田大介社長）は自社のアロマブランドの製品を用いたトリートメントスパ事業に乗り出す。直営サロンを21日に同市八人町にプレオープンさせ、セラピストがアロマオイルで顔や体のマッサージを行う。

同社は県内産のハーブを使ったアロマブランド「Ｔａｒｏｍａ（タロマ）」の製品を２０１８年から販売。新たに店舗でのサービスを行うことで、顧客に商品への理解を深めてもらい、ファンの獲得や販売促進につなげる。

店舗名は「Ｔｈｅ Ｓｐａ ｂｙ Ｔａｒｏｍａ」。酒店だった空き店舗の一部を改装し、広さは23平方㍍。女性セラピストがオイルトリートメントやクレンジング、クレイ保湿パックなどを行う。

オフィス街や繁華街に近い立地で、時間の合間に寄ることができるようにした。同じ建物には美容室や設計事務所なども入居している。

完全予約制。問い合わせや予約は電話０８０（５８５３）６２２４。8月1日にグランドオープンする。

今年秋には、美容と健康の体験型施設「ヘルジアンウッド」（立山町日中上野）にも同じコンセプトの施設がオープンする予定。

イオン白山に出店

ＤＸで植物提案

晴香園

園芸・造園業「晴香園」（高岡市広小路、野上和義社長）は、19日に石川県白山市に開業するイオンモール白山に生花や観葉植物、雑貨などを扱う新店舗＝写真＝をオープンする。陳列に加え、デジタルトランスフォーメーション（ＤＸ）を活用した幅広い植物の提案を進める。

店名は「花と緑の雑貨屋さん ｎｉｃｏｃｏ（ニコッコ）イオンモール白山店」。面積は約１１０平方㍍。店内の一角に55㌅の大型モニターとネット環境を備えたＤＸルームを設けたのが特徴。来店客に自社の生産温室や他店舗の商品も同時に見られるようにする計画だ。ワークショップでも活用する。年間5千万円の売り上げを目指す。

原子力発電コスト「太陽光に劣らず」

電事連会長

電気事業連合会の池辺和弘会長（九州電力社長）は16日、オンラインで記者会見し、原子力は発電コスト面で太陽光に劣らないとの認識を示した。経済産業省が２０３０年時点で発電コストが最も安い電源は、原子力ではなく太陽光になるとの試算を公表したことに対し「原子力はほかの電源

ＥＶ支援へ実証事業

北陸電気保安協　急速充電器を設置

北陸電気保安協会（富山市桜橋通り、須河元信理事長）は16日、電気自動車（ＥＶ）の充電インフラ総合サポート実証事業を行うと発表した。8月から来年12月まで実施する予定。

同協会の富山地区本部（富山市新庄本町）にＥＶの急速充電器1台を設置。新規事業としての展開を見据え、設置工事やメンテナンスのノウハウを習得し、電力使用実績を把握する。

将来的には、急速充電器に加え、太陽光発電や蓄電池などを含めた災害時の対応を顧客に提案をすることを見込んでいる。

とやま経済

現場拝見〈63〉

森の恵みでキノコ生産

森の環（わ）　高岡市葦附（あしつき）

肉厚のかさを付けたシイタケが菌床（人工ほだ木）から競うように生え、7段の棚にずらりと並ぶ。建屋内にある栽培ハウスと呼ばれる空間。菌床の数は七千個余りもあるという。

高岡市南部の中田地区に本社がある森の環（わ）は、シイタケやキクラゲなどキノコを菌床から栽培、販売まで一貫体制で手掛ける。訪れたのは本社隣接工場「あしつきの森」。ハウスは計16ある。蒸し暑い屋外と異なり、中は涼しい。目の前では従業員が棚から菌床を取り出し、シイタケの根元にはさみを入れ一つ一つ手際よく取っていた。新井浩之しいたけ生産課長(55)は「一つの菌床から休養をはさみながら80日余りの間に3度発生させます」と教えてくれた。

◆◇◆◇◆

１９６７年設立。２０１５年に株主変更を経て、18年に現社名に改めた。春日勝芳社長(62)は「目指しているのは、森に始まり、森にかえる循環型農業。自然との共存、人と人など、つながりを大切にしたい」と社名に込めた思いを語る。

21年3月期の売上高は約7億５６００万円。生産の安定化を進め、近年売り上げを伸ばしている。主力のシイタケは年間８００㌧～９００㌧生産し、北陸3県や長野、関東、関西などに出荷。自社オンラインショップでも取り扱う。

生産を支えるのは富山の豊かな森林資源だ。菌床の材料は県内産を中心とした広葉樹の間伐材を使う。これに栄養材を交ぜて形を整えて植菌後、培養する。シイタケは90％が水分。菌床となる樹木の成分などを吸収して育つ。

環境に配慮した取り組みは設備面にも及ぶ。18年から稼働する本社隣接工場は、空調に太陽光や地中熱（地下水）といった再生可能エネルギーを活用する。人工栽培では温度と湿度の管理が重要だ。シイタケ栽培の目安は17度前後、湿度60～70％。空調などでハウスの中を1年中「秋」にするわけだ。

◆◇◆◇◆

同社によると、シイタケ価格は下落傾向にある。経営の安定化には付加価値の高い商品の育成が欠かせない。

高岡市内の別工場「ふくおかの森」では昨年10月から、ハナビラタケを人工栽培する。高山地帯に自生し「幻のキノコ」と呼ばれる希少品種。栄養が豊富な「スーパーフード」として最近注目されている。

淡い色合いにひらひらした形は文字通り花びらのよう。栽培は温度や湿度、CO_2など細やかな管理が欠かせない。キノコは呼吸しているからだ。担当の光地（こうち）綾音さん(19)は「対話する気持ちで一つ一つに目を配っています」と話した。

春日社長は「農業に新しい価値をつくり、心豊かな食をお客さまに届けたい」と力を込める。出荷される新鮮なキノコは従業員一人一人のひたむきな仕事ぶりの結晶に思えた。

（高倉陽）

菌床に生えたシイタケをはさみで摘み取る従業員＝高岡市葦附

昨年10月から栽培を始めたハナビラタケ

企業データ

▼所在地	高岡市葦附
▼設立	１９６７年12月
▼従業員数	１３７人
▼資本金	４８００万円
▼事業内容	菌床キノコの生産・販売

隔週土曜に掲載します

ネトフリ　東京で直営店